

氏名	永瀬 さやか (ナガセ サヤカ)		
学位の種類	博士 (芸術)		
学位記番号	甲第 14 号		
学位授与日	平成 19 年 3 月 23 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
論文題目	<p style="text-align: center;"><b>詩情を原理としたさまざまな知覚レベルでの 交流の呼びかけとしての芸術、 開かれた多元重層的な表現空間の創設</b></p>		
審査委員	主査 教授	本 江 邦 夫	
	副査 教授	李 禹 煥	
	副査 教授	渡 辺 達 正	
	副査 町田市立国際版画美術館学芸員	滝 沢 恭 司	

## 内 容 の 要 旨

私は、銅版画制作により創出される表現空間と小説の執筆により創出される表現空間を、時に衝突させ、相互浸透させながら、「本」という媒体形式をとった作品を作り、表現の可能性を思索してきた。そのような、創作活動を支える最も根源的なものなるものとは、長い歴史の中で人間が理性と感性の掛け合わせのなかで育んできた様々な痕跡のように、己の内部に渦巻く様々な葛藤の中で、いかにしてバランスをとって作品を作り、その作品を公に提示することによって、どう社会に参加してゆくかという終わりなき問いであった。まるでストームのような理性的なるものと感性的なるものとのその絡み合いの中心には常に詩情や、愛、あるいは外部の意思のようなものが存在しており、その全体の振動が何かを生み出すのだ。そして根幹にあるそれを高めてゆく手段が、自分にとって作品制作なのであり、生きることそのものであるように思うのだ。理性により感性的なものを分割し括りこみ、感性により理性的なものを破壊し、常に新たな創造行為を繰り返す。感性を括り込む理性という分割線を常に変更し、括り込まれた規矩そのものを破壊し創造し直すという往復運動によって、作品を生きたものにする。言語化できないものを絵画によって表現し、掴みどころのないものを言語という共通の情報媒体を通して、わかりやすく人に伝えようと再び捉えようとするのである。

メルロ=ポンティも示唆するように「表現」という行為は、人間が存在すると同時に、常に共時的に施行されるものであり、人間が思考する上で切り離せない「身体」そのものなのではないだろうか。視覚的な、あるいは音声的な無尽蔵に湧き出るイメージを直

接的に表現する手段が凝り固まり、ある程度定式化し記号化したものが、言語である。絵文字（ピクトグラム）に代表されるように、発生の期限は絵画と同じでも、その用途によって分化した表現手段なのだ。文字の形式は意味の伝播がより早く正確に行われるために改良に改良を重ねて、人為的に変化させられてきた。よりよい言語形式を取捨選択し、解体し、再構成することによって、ある部分では洗練され、またある部分では複雑化していった。音声的なものと視覚的なものとの多岐にわたる複雑な結びつきが今も新しい表現を生み出しつつある。現代では、パソコンの普及によりプログラミング言語を含め、新しい形態の言語同士が自己増殖し合い、更に新しい領域へと進出しつつある。単に音声的なコミュニケーションや、紙に落とした文字だけでなく、表情や身振り手振りなども含めた情報交換の媒体たる広義の意味での言語形態は、実に無数にある。言語か、言語ではないかは、人間と動物などその他の生物との区分けを勝手にしているような傲慢さでもって、判別しているに過ぎない。動物間のコミュニケーションでは複数のコミュニケーションを交叉させ、組み替えることによって無数の表現を生み出している。長い時間をかけて視覚パターンも音声パターンも少しずつ変化し、進化し続ける。自分の目指す作品形式というものも、このように無数に存在するコミュニケーション手段の組み合わせの一つに過ぎないのかもしれないと思うのだ。人の認識可能な知覚のコードには様々なレベルがあって、このような事物間を行きかう、認識可能な知覚のコードのひとつとして絵画表現や言語表現といった「状態」が存在するのではないかと私は考えるようになった。目指すものが、個々に独立して存在する絵画表現と言語表現の単なる「総和」ではなく、知覚される可変的な表現形態のひとつの「状態」として、両者を認識し、様々な知覚レベルでの交流の呼びかけとして、複数の形式の異なる表現を試みたいという衝動に駆られるのではないかと思うようになったのである。それぞれの形式において表現不可能な部分を互いに補完しあい、不特定多数の鑑賞者の多元的な認識による世界の再構築によってなしえる表現空間であるのだ。作品をある「新規の情報」として不特定多数の鑑賞者が受け取ったときに、個々の脳内で受け取った情報を組み合わせることによって塑像してゆく、新た開かれた多元重層的な表現空間の創出を目指してゆきたいと思っている。もっと複合感覚的な表現が多数存在する中で、何故あえて、感覚の分断を促し、人間の感覚を、視覚的価値を重んじる方向へと導いていった「本」という媒体形式に拘ったかという、言語表現と絵画表現というある種視覚的な表現に絞りながらも、その限られた形式のなかでどこまで他の視覚以外の感覚を呼び起すことができるかという挑戦をしたかったからである。視覚的な表現に絞り込みながらも、表現する上で他の感覚を単純に削り落とさず、様々な感覚同士が交流し合う共感覚的な世界を現出させようと心掛けることで、感覚の分断という難点を克服し、馴染み深い形式ではあるが、その意味で新たな形式のようなものを自分なりに築きあげたかったのだ。表現の形式や組み合わせ方はこれからも変わり続けるであろうが、世界という交流体の一端子となって情報を発信し続け、作品が、人と人とを繋ぐもの、架け橋のようなもの

となるように心掛けて制作してゆきたいと思っている。